

ほんのしるべ

青標

2016.
9月号

2016年9月5日発行(毎月1回5日発行)
通巻454号 昭和61年7月15日第三種郵便物認可

SIEM REAP BOOK CENTER



世界の本屋さん

vol.57

カンボジア シエムリアップブックセンター

ノセ事務所
能勢 仁



カンボジアの首都はプノンペン、観光ではダントツ、アンコールワットであるが、最近、国を挙げて観光客誘致に力を入れている場所がある。それはシエムリアップにあるトンレ・サップ湖である。この湖には水上生活者がいて、水上農園を営んだりして、この人たちが観光源になっている。筆者もトンレ・サップに行っただが、ショッピングセンターが湖上にあっただのには驚いた。

トンレ・サップ湖の玄関 宿の街はシエムリアップである。国際空港もあり、今やカンボジアの玄関になりつつある。ここからアンコールワットにも行けるからである。シエムリアップブックセンターは街の中心地にある。観光地なので、レストラン、土産店が多い。そこに立地する書店であるから、観光客を意識した品揃えと思い

きや、そうではなかった。店頭には絵葉書、地図、ガイドブック、写真集等が並べられていたが、店の奥は歴史、宗教、人文、藝術書が陳列されていた。店長さんに観光客中心のマーケットでないのか質問してみたところ、答えは意外であった。我々の品揃えのコンセプトはこのシエムリアップ住民の生活向上ですと言われた。

この店は間口六間×奥行十間の生活館であった。本三分の一、文芸三分の一、衣類、雑貨三分の一の店である。店頭にはペーパーバックスの古本も並べられていた。参考書、問題集の陳列が面白い。ビニール袋に入れて、例えば英数理をセツトで売っていた。陳列も棚を平台にして刺身陳列していた。文芸書（PB）も売れるが、学参がよく売れると聞いていた。街の文化センターだと思った。

グラウンドにならんでいた模擬店は解体され始め、テントが折り畳まれていきます。金色の夕陽が射して、実家が恋しくなるような秋風が吹いています。これだけ味わい深いお祭りが解体され、日常へと戻ってゆくのだと思うと切なくなります。

『夜は短し歩けよ乙女』

森見登美彦著（角川文庫）より



もくじ

世界の本屋さん 57

「書標」歳時記（9月）

著書を語る(53) 『星はらはらと二葉亭四迷の明治』

太田 治子

書評 『はつみみ植物園』 ほか

特集 大人の「道徳」

自分で考えることの意味をとらえなおす

植物愛入門

ベランダからウィルダネスまで

今月のおすすめ

コンピュータ	15	自然科学	16
医学書	17	社会科学	18
人文科学	20	文学・芸	21
文庫・新書	22	芸	23
実用書	24	地図・旅行書	24
語学・辞典	25	児童書	26
読者から			
インフォメーション	27		
本屋つらばなし 「アジアミステリーブームは やってくるか」	30		

※表示価格はすべて本体価格です。

『星はらはらと 二葉亭四迷の明治』

太田 治子



「太田さん、二葉亭四迷の本は売れませんよ」

『星はらはらと 二葉亭四迷の明治』を、月刊誌『望星』に連載中からよくそのようにいわれた。まだ本になるかどうかともわからないうちから、そんな言葉を續けていわたことは今までになかった。二葉亭四迷は、そんなにも古臭い小説家に思われているということなのだろうか。

「そうですね。恐らく、売れないでしょうね」

そう答えながら、何故か心は明るかった。実のところ二葉亭四迷の小説は、決して古臭くなんかない。それどころか、今のこの危っかしい時代にこんなにもぴったりとした小説が、明治という時代に生まれていたことは驚きなのだった。言文一致の最初の小説『浮雲』の主人公、文三は、現代の悩めるハムレットに思われた。「立身出世」がエリートの名詞だった時代に、あえてそれに背を向けて生きる文三は、実にかっこよいと思う。上司にゴマをすれない不器用な性格ゆえに官吏をリストラされてしまうと、さすががしさを感ずるのである。何よりもすばらしいと感じたのは、女性への弱気な受け身の姿勢だった。真正正銘のエリート

でありながら、下宿先の娘のお勢にいいようにふりまわされてしまうところが、この上もなくチャーミングである。

「……眼に見る景色はあはれに面白い。とはいへ心に物ある兩人の者の眼には止まらず、唯お勢が口ばかりで

「ア、佳こと」

トいつて何故ともなく莞然と笑ひ、仰向いて月に観惚れる風をする。……（中略）……文三の眼は俄に光り出す。

「お勢さん。」

但し震聲で。

「ハイ。」

但し小聲で。

「お勢さん、貴嬢もあんまりだ、餘り……残酷だ。私は是れ……是れ程までに……」トいひさして文三は顔に手を宛て、黙って仕舞ふ。意を注めて能く見れば、壁に寫つた影法師が、慄然とばかり震へてゐる。……（『浮雲』）

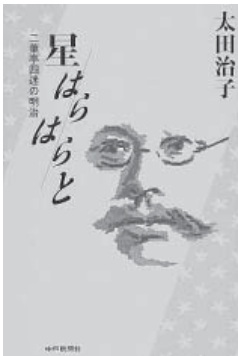
恋しい女性の前で顔を覆ってしまう気弱な男性は、竹久夢二の絵の中にも登場する。大正ロマンの時代だからこそ、このような絵が生まれたのだと思っていた。しかし、「富

「国強兵」を国是とする明治という時代にも、一方で彼のよ
うな男性が登場していたのである。徴兵制度で若者を押し
込めようとした時代にあつて、ちゃんとその枠からはみで
たままの文三がいた。一見頼りない男性に思われても、国
の理想とする若者像から外れることは、大変な勇氣がいる。
あくまで女性に弱気な文三に、私はむしろ真の心強さを感
ずくにはいられない。

お勢はその名前の通りに、時の勢いに流されている。文
三のかつての同僚のお調子者の本多になびいて、文三は失
恋する。しかし、その後の彼の心は、お勢を思いちぎりに乱
れるのである。この深い心理描写こそ、夏目漱石も森鷗外
も認めるように日本の近代小説のさきがけである。人間の
心の複雑さをここまで刻明に描いた作品が明治二十年代に
生まれていたことに、目をみはる思いがする。

きっぱりとあきらめることなく、ぐずぐずとお勢に思い
を寄せ続けるところは、「男らしくない」といわれそうであ
る。しかし、そもそも、「男らしい」とは、どういうことな
のか。西郷隆盛は、「男らしい」の代名詞のようにいわれる
ことがある。『星はらはらと』を書きながら、私は西郷さん
についても勉強した。二葉亭四迷が、西郷隆盛を敬愛して
いたからである。彼は、征韓論派の代表のように今もいわ
れている。ところが現実には反対だった。彼は平和外交を考
えていた。たった一人でおともも持たず、刀も持たない丸
腰で海を渡り直接交渉しようと考えた。しかしこのことは、

大久保利通らにより強硬に反対されてしまったのである。
明治という時代は、西郷隆盛の死後も彼を征韓論者だつた
とすることとなりたつていったところがあつた。昭和の戦
後の教科書にもなおそのように書かれてきたことは、何ん
とも不可解なのだった。『星はらはらと』を書きながら、私
は明治という時代の影の部分について考えることができ
た。明治のロシアと日本の関係について調べるうちに、日
露戦争は起こらなくてもよい戦争だつたのではないかとい
う気がしてきた。最晩年の二葉亭四迷は、日露戦争後の明
治四十一年七月朝日新聞ロシア特派員としてペテルブルグ
へ向つた。日本を出発する時の送別会で、彼はこのように
スピーチした。「いずれの国の人も戦を好みはせぬ。政府が
戦おうとしても、人民が戦わぬから仕方が無いというよう
にする事だ」。これは、そのまま今の日本の私たちが考えて
いかなければならないことではないだろうか。



『星はらはらと
二葉亭四迷の明治』
中日新聞社・1,800円



『はつみみ植物園』

西島清順文 はつみみ工房画

東京書籍・一四〇〇円

「プラントハンター」なる耳慣れぬ言葉が、本書の著者・西島清順の肩書きである。兵庫県で花の卸売業者を経営する彼は、年間地球十周分の距離を飛び回り、世界中から様々な珍しい植物を収集する。同時に様々なイベントにおいて植物を活用するプロジェクト「そら植物園」を運営し、世間に植物の魅力を紹介し続けている。近年は「NHKスペシャル」などのテレビメディアにも出演しているため、その活動を知っている方も多いただろう。

本書は西島による書下ろしの植物エッセイであり、二〇一三年刊の『そらみ植物園』（東京書籍・一四〇〇円）に続いてシリーズの二作目となる作品である。世界中の奇妙天烈な植物をコミカルな筆致で紹介した前作に対し、本作は植物に関する様々な「はつみみ」の豆知識、トリビアを紹介する形式になっている。「なぜ花は香りを持つのか」「なぜ野菜はおいしくなくて果物

はおいしいのか」といった、子どもが大人に問いかけるような植物に関する素朴な疑問に、西島がユーモラスに答えている。知識としてはもちろん、エッセイとしても非常に読み応えがあり、植物の魅力を丁寧に伝えてくれる。美術大学の学生たちによる凝ったイラストも魅力的だ。

書籍の後半では、西島が手掛ける「そら植物園」の作品や西島の語録を紹介している。大胆なレイアウトで風景や植物を融合させているその光景は壮観であり、こちらこそ西島の植物への情熱が伝わってくる。

(小)

『アンマーとぼく』

有川 浩著

講談社・一五〇〇円

皆さんにとって、「母親」とはどういう存在だろうか。この物語の主人公「リョウ」には二人の母親が存在する。そしてその二人の母親は、「リョウ」を生んだ実の母親を「お母さん」、実の母親との死別後父親と再婚した義理の母親を「おかあさん」として表現されている。

物語は「おかあさん」に親孝行をするため、「リョウ」が故郷である沖繩に二泊三日の帰省をする場面から始まる。そんな

「リョウ」は、沖繩に行く前自分がどんな生活をしてきたのか、どんな仕事をしてきたのか、まったく思い出すことができない。そんな曖昧な記憶のまま「おかあさん」と沖繩で過ごす現在。「お母さん」を亡くして間もなく父親に再婚を告げられ、その相手である「おかあさん」と彼女の故郷でありこれから自身が生活をする沖繩を受け入れられなかった過去。その二つの時間が物語の中で混在し、不思議な時系列と雰囲気を生み出している。

終盤、それまでずっと片仮名で書かれていた「リョウ」の本名が明らかになると同時に、物語は一気に加速していく。「お母さん」の死後まもなく再婚した父、放浪癖があり自分の気持ちなどわかってくれないと思っていた父、そんな父にも間違いない愛されていたのだと「リョウ」は気づく。急に母親になり少なからず戸惑ったであろう「おかあさん」もまた、父や「お母さん」に負けないくらい自分を愛してくれたのだと気づく。そして、今沖繩にいるこの瞬間が奇跡であることにも。沖繩での三日目が、終わる。「リョウ」の世界が、ふっと溶けていく。この物語を読み終えた人たちに、もう一度聞きたい。

皆さんにとって、「母親」とはどういう存在だろうか。(な)

『デモクラシーは、仁義である』

岡田憲治著 角川新書・八〇〇円

デモクラシー＝民主主義の旗色は、今日決して良くない。

ソクラテスを刑死させ、ナチスを生んだ歴史が繰り返し断罪される。決定に時間がかかり物事が前に進まない元凶とされ、目指したはずの平等は達成されず格差は広がると称して国家に逆らうと攻撃される。

だが、ソクラテスの弟子プラトンの「哲人王」は歴史上一度も実現せず、ヒトラーの台頭はデモクラシー「ゆえに」ではなく、デモクラシー「ですら」と見るべきだ、と岡田は反論する。

デモクラシーは、多数決ではない。「自らの生活や人生に影響を与える決断事に対しては、誰しも物申す権利が平等に与えられている」ことを原則に社会を運営していくしくみである。そもそも決定の速度は求めておらず、熟慮と熟議こそ、その本質だ。デモや政治的発言は「肺呼吸」のようなものだ。

デモクラシーが多数決をも、エリートのリリーダーシップをもその駆動力としないのは、素人も専門家も、人間は必ず間違えるからである(福島原発事故を見よ)。そのことの自覚が、デモクラシーを政治原理として成立させ、人類に浸透させてきた。

今デモクラシーにとって大切なのは、「純粹合戦」をやめること、そして対話のための言葉を豊かにすることにコストと手間を惜しまないことである。

デモクラシーとは、何よりも「他者」の尊重なのだ。人が扶けあって生きていくうえで欠かせない掟、即ち仁義なのである。

(フ)

『ギケイキ』

町田 康著 河出書房新社・一六〇〇円

「こんな〇〇初めて」という言い回しがある。「普通はこうだ」と思っていたのに、予想外の事が起こった時に使われる。

ところで、「義経記」という物語がある。室町時代に成立した軍記で、その名の通り源義経の幼少時代(牛若丸)から没落までが描かれており、昔から日本人に親しまれている。そんな「義経記」を、あの町田康が書いた。帯にはこんな言葉が添えられて

いる。「平家、マジでいつてこます」。いつもながらの、こてこての関西弁にやられた。読み始めると、一行目から驚かされる。

「かつて、ハルク・ホーガンという人気レスラーが」。ハルク・ホーガン」である、「人気レスラー」である。なるほど、これは著者自身が語り手というタイプの小説なのだ、町田康が強者をハルク・ホーガンに例えたのだと読み進むと、なんと、この語り手は義経である事が分かる。義経は、現在の日本を熟知しているようで、「いまだ言う」と玄関先にSECOMと書いたシールを貼っておくようなもの」なんて事を言ったりする。あまつさえ、「知らない間に精神的に殺されてゾンビみたいになつて。奴隷にされているの気づかないで自分は勝ち組だと思ってる。」なんて、現代人を厳しく批評したりもする。しかもファッションおたく。

町田康らしい関西弁と、現代の若者が使うような話し言葉を織り交ぜられた、笑いをふんだんに盛り込んだ物語に、濁流にのまれたように、脳みそをもみくちゃにされながら、あつという間に読了。呆然としたがら、たった一つ思うこと。「こんな義経記初めて」。(玉)

大人の「道徳」

自分で考えることの意味をとらえなおす

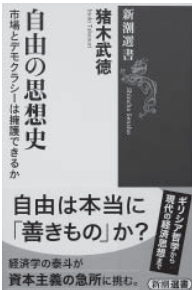
今月の愛書家の楽園は「大人の「道徳」」をテーマに掲げました。きっかけは、小学校・中学校における「道徳」の教科化が決まったことに対する疑問です。

検定基準を設けそれに基づいた教科書を使つての授業が実施されるのは、小学校が二〇一八年度、中学校が二〇一九年度とのこと。「教科」になつても数値による評価はなされない。でも、これまでも中途半端な扱いしかされてこなかつたものを「教科」として何を教えるのか。なんとなくいかがわしさを感じてしまいましたが、ただ、筆者が小学生の時、道徳の時間に視た「みんななかよし」という番組は主題歌を今も歌えるくらいよく覚えていて、ある種の道徳的なものの大切さ、必要性もわからなくはない。

月日が経ち大人になってみて、そもそも（教える側になるであろう）大人が「道徳」とはどういうものかよく考えたことがあるのか、十歳の娘を持つ一人の親として、自戒をもって、そして本を通じて考えてみたいと思つたのです。

大人にとつての「道徳」を考えるには、まずは「自由」ということについて向き

合う必要があると思います。そうすることで社会そのものがどう成り立っているのかということや、「公共の利益」という概念の重要性も併せて考えることができるからです。どうも上からの道徳の押しつけは「公共」を盾にして「奉仕」を求める型のものが多いだけに、自由と公共の利益、秩序というものの関係を深く捉えることが重要です。そのためには、猪木武徳先生の二冊の書物、「自由の思想史・市場とデモクラシーは擁護できるか」（新潮選書・一三〇〇円）と「自由と秩序：競争社会の二つの顔」（中公文庫・八〇〇円）が必読文献です。さまざまに古典を繙きながら人間の思索の歴史を見事に描きつつ、猪木先生ご自身のご経験・読書体験もふまえて、自由をめぐる現代の課題を明確にしてくれます。



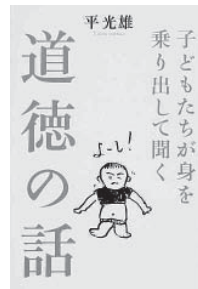
『自由の思想史』

われわれの社会が円滑に展開されていくための洞察を徹底的に行ったのが、アダム・スミスでした。アダム・スミス著／村井章子・北川知子訳『道徳感情論』（日経B Pクラシックス・三二〇〇円）は、古典中の古典と言ってもよいでしょう。しかし、この書物にいきなりチャレンジするのは難しいとお考えの方もいると思います。でもご安心ください。堂目卓生『アダム・スミス…『道徳感情論』と『国富論』の世界』（中公新書・八八〇円）は、原典を読まなくても、この本を読むだけで、ミスが語った「秩序を導く人間本性」について十分な理解へと導いてくれますし、そのスミスの道徳哲学者としての思考の深まりが『国富論』へとつながる道筋を鮮やかに示してくれます。新書でここまで密度の高いものは、近年のなかでは本書が傑出しているのではないのでしょうか。

堂目先生は、『道徳感情論』のキーワードである「同感」（共感）の仕組みを整理するなかで、「私は（人々は…引用者、以下同）、経験をもとに公平な観察者を胸中に形成し、その是認・否認にしたがって自分の感情や行為を判断するようになる。／同時に、私は（人々は）、胸中の公平な

観察者の是認・否認にしたがって他人の感情や行為を判断するようになる。／こうして、私は（人々は）、当事者としても、観察者としても、自分の感情や行為を胸中の公平な観察者が是認できるものに合わせようと努力する。」としています。このことはまさに社会秩序を基礎づける原理（道徳原理）のポイントです。スミスとほぼ同時代を生きた、ヒュームとヴォルテールの著作も併せて読むことで、立体的な理解がさらに深まるはずですよ（ヒューム著／土岐邦夫・小西嘉四郎訳『人性論』（中公クラシックス・一五五〇円）、ヴォルテール著／斎藤悦則訳『寛容論』（光文社古典新訳文庫・一〇六〇円）。また教師や親向けの書物ですが、平光雄『子どもが身を乗り出して聞く道徳の話』（致知出版社・一五〇〇円）の冒頭「自尊」のところでも「自分」には「する自分」と、それを「見ている自分」がいて、それは「他人にはわからなくても、いつも厳しい、中立な目で見ている。誤魔化せない。」と語られます。それを平さんは、「もう一人の自分、「目玉おやじ」と子どもたちに説明しているのですが、これってまさにスミスの「公平な

観察者」のことでないでしょうか。



『子どもが身を乗り出して聞く道徳の話』

自由になるためには知性の裏付けを持つてることが必要です。ただ、それを身に着けることは容易ではありませんが、そうなるために不断の努力を継続することが何より大切で、それを子どもに見せることが、大人の道徳の実践とも言えるでしょう。

その自由になるための術、リベラルアーツを身につけるためにはどうしたらよいのか。そのための導きになるのが、石井洋二郎・藤垣裕子『大人になるためのリベラルアーツ…思考演習12題』（東京大学出版会・二九〇〇円）です。リベラルアーツとは、「……人間を種々の拘束や強制から解放放つて自由にするための知識や技能を意味」します。そこではいくつかの「限界」を乗り越える必要が

あります。同書では「知識の限界」「経験の限界」「思考の限界」、そして「領域の限界」が挙げられています。知識量や視野の狭さ、自分とは価値観の異なるものと関わる機会、量的な努力だけでは解決できない思考の深まり、そして無意識に囲いこまれ／囚われてしまうものをどうのように自覚して乗り越えるか、本書を通じて、まずは考えてみましょう。



『大人になるためのリベラルアーツ』

そのうえで、やはり「自分で考える」ことの重要性をつねに意識すべきです。野矢茂樹『哲学な日々…考えさせない時代に抗して』（講談社・一三五〇円）の著者・野矢先生は、大学で哲学を教える先生ですが、哲学は実技、体育に似ているとおっしゃっています。先生は「……哲学は私たちが生きていくことに対してメタ的な態度をとる。日々こうして生き

ている。だけど、ちょっと待てよ。いったいこれは何なのだろう。私は、何をしているのだろう、これはどういう意味なのか。そんな問いが浮かんでくるとき、あなたは哲学に足を踏み入れている。」と言ひ、教師と学生が一緒に問題を考える、身をもって哲学を体験することを意識されています。そんなとき、リベラルアーツが大きく浮上してくることは言うまでもないでしょう。自分で考えるようになるには、他者との関係も含め、「自由」になるための構えが絶対に必要なのです。（併せてブレンダン・ウィルソン著／山本史郎訳『自分で考えてみる哲学』（東京大学出版会・二四〇〇円）も参考にしてみてください。）



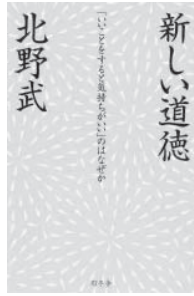
『哲学な日々』

哲学やそのひとつの基礎付けとなる「道徳」は極めて実践的な試みのなかからし

か出てこないと思います。それを実感させてくれたのが、アリストテレス著／渡辺邦夫・立花幸司訳『ニコマコス倫理学上・下』（光文社古典新訳文庫）でした。個人的には、学生時代、岩波文庫版でこの『ニコマコス倫理学』に挑戦したのですが、最後まで読めませんでした。ところがこの新訳版で読むと、アリストテレスの思考のアクティブさが生き活きと実感できて、実に楽しい読書体験でした。随所に「徳」（アレテー）についての議論が出てきますが、アリストテレスの議論は抽象的なものでは決してなく、彼の実践的なから導き出されたものであることが豊富な例とともに感じとれます。「道徳」を考えるための基本書とも言えましょう。

また野矢先生やアリストテレスをひかなくとも、われわれの同時代のヒーローでもある北野武氏がその著書（『新しい道徳…「いいことをすると気持ちがいい」のはなぜか』幻冬舎・一〇〇〇円）のなかで、「古くさい道徳を子どもに押しつけたって、世の中は良くなかならない。そんなことより、自分の頭で考え、自分の心で判断できる子どもを育てる方が大切だろう。そのためには、まず大人が自

分の頭で考えることだ。」と述べています。そのとおりですね。「大人が自分の頭で考える」ことの重要性は、北野武氏の著書もそうですが、前田司郎「口から入って尻から出るならば、口から出る言葉は」(晶文社・一六〇〇円)、中村うさぎ「あとは死ぬだけ」(太田出版・一四〇〇円)、平野啓一郎「私とは何か…個人」から「分人」へ(講談社現代新書・七四〇円)などのエッセイと共に構えを楽にして考えてみてください。



『新しい道徳』

「道徳」という基準が、われわれの経済社会活動にどのような意味をもつのか。それを強く意識して現代日本の基礎をつくってくれたのが洪沢栄一です。洪沢は「利益を棄てたる道徳は真正の道徳ではなく、又完全な富、正当な殖益には必ず道徳が伴はなければならぬ筈のものであ

る。」(『青淵百話・乾』一九〇頁)、また、『論語と算盤』(角川ソフィア文庫・七六〇円)では、「……富をなす根源は何かといえ、仁義道徳。正しい道理の富でなければ、その富は完全に永続することができぬ。」と述べています。昨今の経済事件からもこの指摘の重要性は色あせませんし、これも洪沢が自ら考え、多様な経験から導かれたものだけにとても迫力があります。しかも、漢学という教養を背景に持つ、洪沢が依っている『論語』を中心とした中国古典の広大な思想的深まりは、アンヌ・チャン著／志野好伸・中島隆博・廣瀬玲子訳『中国思想史』(知泉書館・七五〇〇円)で、ぜひ触れてみてください。知的刺激満載の書物です。

最後に、池澤夏樹『沖繩への短い帰還』(ポーターインク・二四〇〇円)を挙げさせていただきます。本書は作家・池澤夏樹さんが沖繩在住だった約十年間に書かれた、沖繩に関するエッセイ、書評等をまとめたものです。なぜここでこの書物を取り上げるかというと、現在もなお続く沖繩をめぐる問題は、われわれにとつてもっとも道徳的な(モラルの、倫理的な)

問題として、一人ひとりが捉えて、自分の頭で考えるべきであることを共有したいからです。

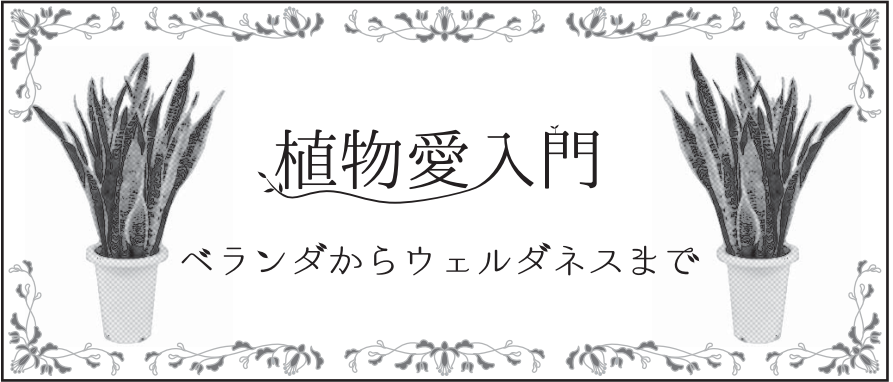
自分で考えることの重要性を認識し、そのための知的訓練を怠らず、そして多様な実践のなかで自らの「道徳」(倫理)を磨き上げ、沖繩が抱える問題のように、複雑で決まった答えの型がないような課題に果敢に立ち向かっていく姿勢を、大人たちが次世代の人たちに見せていきたいものです。



『沖繩への短い帰還』

(東京大学出版会・黒田)

*愛書家の楽園・特集「大人の『道徳』」で紹介した書籍は、ジュンク堂書店池袋本店一階エレベータ前と福岡店三階、丸善名古屋本店一階と京都本店地下二階にて、九月十日〜十月九日までフェア展開中です。



植物愛入門

ベランダからウェルダネスまで

私の部屋にあるサンセベリアは葉が広がりすぎてしまうからと、かわいそうなことに紐でぐるりと縛られてしまっている。しかしけなげなサンセベリアはそんなことにもめげず、根元からあらぬ方向に新たな葉をぐぐいと伸ばし紐の束縛から逃れ、文字通り伸び伸びと生きていく。

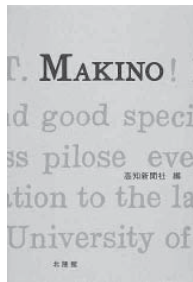
植物が身近にあると、色々なことに気づかされます。このサンセベリアもそうですが、植物は、もはや自身には見出せなくなった「成長」を間近に見せてくれます。世話をするという使命感は生きる目的を見失いかけた人々にとって「生きる活力」となりますし、また、植物の存在自体が同じことの繰り返しにしか感じられない味気ない毎日に「季節感」をもたらしてくれます。

なんて、後ろ向き過ぎました。でも実際のいいんですよ、植物。本稿では植物を身近に感じられるような本や、植物を身近に感じていた先達の著作を紹介したいと思います。

牧野富太郎に会いに行く

まず、日本において植物を語る上で絶対にはずせない人物の紹介から。それは

誰よりも植物を愛し、小学校中退ながら独学で日本における植物学の基礎を築き上げた「日本植物学の父」牧野富太郎です。昭和十五年に編纂した『牧野日本植物図鑑』（北隆館・一五〇〇〇円）は今でも研究者や愛好家の間では必携書である、と言えばその存在の偉大さが伝わるでしょうか。



『MAKINO』

新種一〇〇〇種、新変種一五〇〇種以上の日本植物の命名、名誉都民第一号、第一回文化功労賞受賞、などなど研究者としての素晴らしい一面はもちろん、借金うん億円、こどもは十三人など、粹に取まらない土佐のいごっそうな一面も描かれた、世界の牧野の人物像がくまなくわかる一冊が生誕一五〇周年記念に出版された『MAKINO』（北隆館・高知新聞社編・二二〇〇円）です。年表や全

国踏査マップなど、痒い所に手が届く仕様もお見事。あの『牧野日本植物図鑑』の北隆館から出版されていることもあり、信頼度も抜群です。

図鑑とまではいかずとも、文庫でもう少し手軽に氏の研究成果を知りたいという方には「植物一日一題」（ちくま学芸文庫・一〇〇〇円）をお勧めします。牧野氏が八十四歳の時に刊行した随筆集ですが、植物名に用いられた漢字の誤用を激しく糾弾するなど、植物への新知識、新たな知見を明快な言葉で語り、植物を愛する人間的魅力まで感じられる一冊です。

また、理系の偉人のエッセイを初學者にもわかりやすくまとめた「STANDARD BOOKS」シリーズの『牧野富太郎 なぜ花は匂うか』（平凡社・一四〇〇円）も味わい深い本です。「植物と心中する男」というエッセイにある「私は植物の愛人としてこの世に生まれてきたように感じます」「飯よりも女よりも好きなものは植物」などという言葉はなかなか聞けるものではありません。

本を読み、牧野氏への興味が湧いて来たら、高知県立牧野植物園へもぜひとも足を運んでいただきたいです。牧野御大

の功績が身近に学べるだけでなく、牧野氏のもとで幸せそうに茂る草木や咲く花を目の当たりにできるといふ至福の時間を過ごすことができます。あなたはきっと牧野像の下で同じポーズで写真を撮ると予言しておきましょう。

できることから始めよう

日本植物界トップへのご挨拶が済んだところで、では早速植物を育てよう！と思っても実際この狭い日本のマンション暮らしには植物を育てる庭がない、とお嘆きの方もいらっしゃると思います。そんな方にはいとうせいこう氏の『ポタニカルライフ』（新潮文庫・六三〇円）、そしてその続編『自己流園芸ベランダ派』（河出文庫・七〇〇円）をお勧めします。編集者であり、日本語ラップの先駆者であり、作家であり、俳優であり、とマルチな活躍をされているいとうせいこう氏は自ら「PLANTED」という植物雑誌（残念ながら現在廃刊）を立ち上げるほどの植物好きでもあります。

ガーデナーではなくベランダを標榜する氏は、「枯れるのは置き場所のせい」だとか「水さえやるときゃなんとかなる」

など初心者にはこれ以上ない心強い言葉をかけてくれます。本書の隅々にまで行き渡る「植物愛」は、愛さえあれば大丈夫、と枯らしては途方に暮れているあなたの肩をそっと抱きしめてくれることでしょう。



『ポタニカルライフ』

もう一冊、植物生活を別の角度から身近にしてくれる本をご紹介します。それは、元スバルのカーデザイナーであり、アジア初の公認サンタクロースであり、自称餃子の王様である、私の個人的な尊敬ポイント満載の音楽家・パラダイス山元氏の『ザ・マン盆栽』（全三巻、文庫PLUS・これも本当に残念ながら品切れ）です。老人の趣味という色合いが濃く、またお金がかかりそうで遠い存在であった「盆栽」にフィギュアを飾る、それだけで、我々の身近なものにする

いう異彩を放つ啓蒙の書です。

そして、いよいよ園芸家としての第一歩を踏み出したあなたに是非読んでもらいたい一冊が、先のいとう氏の『ポタニカルライフ』執筆のきっかけとなった、カレル・チャペック著『園芸家12カ月』(中公文庫・四九五円)です。チェコの代表的作家であるチャペックは写真、絵、犬など様々な趣味を持ち、その中でも園芸に対する凝り性は相当のものでありました。そんなカレル・チャペックが自らの経験をもとに、園芸家の生感を一年十二カ月に分け、自虐を交えユーモア満点に綴ったのが本書。一九二〇年代のチェコでも現代日本でも園芸家の思い、植物への愛は変わりないとわかります。



『園芸家 12 カ月』

育てるのではない植物の愉しみ方を育てるのではなく、身近にある草花

を愛するという方法論もあります。その際は散歩の同伴に『柳宗民の雑草ノート』(ちくま学芸文庫・柳宗民/文、三品隆司/絵、一〇〇〇円)を、二巻までありますが、二巻は品切れです。

図鑑だけれど、ただの図鑑では収まらない本書。それは、ふんづけられてもへこたれない雑草に対するサディスティックな目線ではなく、「美人も不美人も差別なく」身近にある草花を愛情たっぷりに血の通った紹介をしているからでしょう。



『川瀬敏郎 一日一花』

また育てる以外では、私のような門外漢が深く立ち入ることは非常にはばかれますが、生け花もよいものです。門外漢でも本から入るくらいは許していただけるでしょう。それならばお勧めするのは『川瀬敏郎 一日一花』(新潮社・

三五〇〇円)です。華道家川瀬敏郎氏が震災を契機に、タイトル通り一年三六六日「生者死者、誰かのために」と毎日花を生けつづけた祈りの記録。研ぎ澄まされた美意識に圧倒されます。白黒ながら写真付きの索引まで拔かりなし。

素敵な庭に憧れて

ベランダや部屋のなかでの園芸生活が順調に始まって、心のどこかにある庭への憧れ。実現できなくとも本によっていい庭を知ることができます。

ロンドン郊外のダンジュネスというさびれた海辺の町にあるプロスペクターコートという元漁師小屋で、映画監督デレク・ジャーマンがエイズで亡くなる一九九四年までの八年間庭づくりをした記録、それが『Derek Jarman's garden』(Thames & Hudson、邦訳の光琳社版は版元廃業により絶版)です。庭に関する本を紹介するうえで絶対に外せない一冊。潮風が吹きつける石ころだらけの荒涼とした土地を「パラダイス」と自ら呼ぶ、漂流物や波で削られた岩などをセンス良く配置し、かつ手を入れすぎない「ぼうぼう」の庭に仕立て上げました。写真

家ハワード・スーリーの写真も美しい。この本からはまねのできないセンス、「ぼうぼう」のよさ、手を入れすぎない植物自身の強さに任せる庭づくりと、何より自然に対する謙虚さを学びたいです。

日本における庭造りで参考にしたのは津端英子、津端修一夫妻の庭です。愛知県の町中にキッチンガーデンを作りました。一九二〇年代生まれのお二人の、ゆっくりときめ細やかで丁寧な生活をたくさんの写真とともに紹介した『あしたも、こはるびより。』『ひでこさんのたからもの。』（主婦と生活社・各一四〇〇円）など、比較的買いやすい（在庫している書店が多い）本もあるのですが、ここではあえて（品切れ書目ではありませんが）お二人の小品『キラリと、おしゃれ』（ミネルヴァ書房）を紹介します。二人の出会いから、手作りのキッチンガーデンの実践まで、文学や芸術への造詣とセンスの良さをちりばめながら書かれた本書を英子さんのおっしゃるように「花粉の飛び散るように」お届けしたいです。本棚に収まる姿もかわいらしくて上品。ぜひ重版を検討していただきたいです。

思索を深める

植物を育てたり、庭仕事をする中で人はときに哲学者や詩人になります。そもそも詩人や文学者が庭づくりを描いた本も多くあります。そこでは単なる庭づくりのノウハウなどにとどまらず、深い思索が描かれます。



『庭仕事の愉しみ』

例えばドイツの文豪ヘッセ。ヘッセ研究の第一人者フォルカール・ミヒェルス編集によるテーマ別シリーズの一冊『庭仕事の愉しみ』（草思社文庫・一〇〇〇円）では、文豪ヘッセが自らの庭仕事を通して学んだ自然と生き方についての哲学を語ります。自筆のカラー水彩画と写真も多数収録。見返りなく労苦を伴う「園芸」という行為に荒廃する人間精神の回復を見出すヘッセの「土と植物を相手にする仕事は、瞑想するのと同じように、魂を

解放してくれるのです」という言葉に、あらゆるものが凝縮した「庭」という存在を改めて認識させられます。

例えばタイトルの響きも素晴らしい『夢見つ深く植えよ』（みすず書房・メイ・サートン著、品切れ）。詩人で作家、四十六歳の独身女性であるサートンが、ニュージーランドに古い屋敷と広大な敷地を手に入れ、一人暮らしを始めます。庭づくりだけでなく、家のしつらい、光や色への逡巡や個人的な隣人との付き合いまで、愛情のこもった、かつ静謐な言葉で語られます。「庭づくりほど多くを要求し、多くを与えるものが他にあるだろうか。おそらく、詩を書くことのほか私は知らない」。生涯のテーマである孤独と向き合った作家の言葉が胸に響きます。

森にまつわる文学と言えば真っ先に挙げられるのが『森の生活—ウォールデン』（講談社学術文庫・ヘンリー・D・ソロー著・一四五〇円、他訳書多数）。十九世紀アメリカを代表する思想家がボストン近郊にあるウォールデン池のほとりに小屋を建て、二年二か月の間ひきこも

り、自ら実践した物質文明と一線を画した自然の中での暮らしとその思想をつづったアメリカ文学の古典的名著。人生のあるべき姿、精神生活の大切さ、森の動植物への情愛を語りながらも単なる隠遁生活にとどまらず、すべてのモノの値段を問ひ直した経済文学ともいえる内容です。



『森の生活
ウォールデン』

ソローについては『孤独の愉しみ方 森の生活者ソローの叢智』（イースト・プレス・一三〇〇円）という、彼のエッセンスをまとめた書籍もあります。『森の生活』に読み躰いたらばこちらで雰囲気を感じ取るのも良いでしょう。

そしてウィルダネスへ

身近に植物を感じる生活は良いですよ、という軽いお誘いのつもりが、思え

ば遠くへ来てしまいました。勢い、このまま続けます。

「植物」とどまらず身近に「大自然」を感じるための参考書として絶大な信頼を置ける一冊が、バックパッカーのバイブル『遊歩大全』（ヤマケイ文庫・コリン・フレッチャー著・二二〇〇円）です。家を背中に背負って身一つで旅をするためのノウハウが、一〇〇〇ページ近い分量の中にこれでもか／＼と詰まっています。詰まっているのはハウツーだけでなく、自然の中で生きるための思想にまで踏み込んでおり、行き過ぎたエコロジーへの警鐘など自然礼賛に終わらない部分にもある、自然と対峙する著者ならではの目線が絶大な信頼を寄せられる理由でしょう。



『遊歩大全』

今年没後二十年になる星野道夫氏の

『旅をする木』（文春文庫・四八〇円）も大自然を感じるための必読書としたいです。アラスカの厳しい自然と、そこで生れ出会う人々との深い関わりを、誠実に味わい深い言葉で語ります。先の『遊歩大全』と同じく本書でも、ありがちな自然保護や動物愛護ではなく、本質的な「生と死」が描かれています。



『旅をする木』

最後に。このまとまらない文章に一貫したものがあるとするならば、それは植物への愛です。家のベランダでもアラスカの大地でもどこでも、植物を、そして自然を身近に感じてほしいと思います。『センス・オブ・ワンダー』（新潮社・レイチェル・カーソン著・一四〇〇円）、すなわち、「神秘さや不思議さに目を見張る感性」を忘れずに。

（三宮駅前店・堀内）

今月の
おすすめ

コンピュータ

〈インターネット〉の次に来るもの

ケヴィン・ケリー著 服部 桂訳

インターネットがこれほど世界を席卷するとは、三十年前には誰も想像がつかなかったという。ではこの先三十年の未来もまた、予測ができないのか。雑誌WIREDの創刊編集長として知られる著者は、予測は可能だと本書で述べる。現在の技術に内包されている未来へのベクトルを「ビカミング」「シェアリング」といった十二の法則に分類し、これから乗るべき潮流を見据える。

NHK出版

二〇〇〇円



復刊 計算機の歴史

ハーマン・H・ゴールドスタイン著

末包良太、米口 肇、犬伏茂之訳

計算機の黎明期を記した名著が待望の復刊。初版は一九七九年。著者はENIACの開発計画に携わり、後にIBMで要職を歴任するなど、計算機の歴史をその目で直に見てきた人物だ。パスカルの機械式計算機からはじまり、戦時における弾道計算の必要から電子計算機が生まれ発達していくまでが、詳細に描かれている。

共立出版

五八〇〇円

続・インタフェースデザイン
の心理学

Susan Weinschenk 著

武舎広幸、武舎のび、阿部和也訳

心理学的研究から得られた知見をUIデザインに適用した前著『インタフェースデザインの心理学』(同社・二八〇〇円)から四年。最新の研究結果をフィードバックした続刊が登場した。「二歳児の三割はタッチスクリーンを使用したことがある」「タスクが五分以内で済む場合、人はスマートフォンを使う」など、次代のUIデザインに必須の知識が満載。

オライリー・ジャパン 二八〇〇円

ビットコインとブロックチェーン

アンドレアス・M・アントノプロス著

今井崇也、鳩貝淳一郎訳

注目を集める仮想通貨ビットコインだが、その仕組みを理解するのは難しい。トランザクションにブロックチェーン、マイニングといったビットコインの基幹技術は、それぞれが密接に繋がることで高いセキュリティと分散型システムを実現しているからだ。技術の解説に力を注いだ本書を読めば、その全体像を概観することができる。

NTT出版 三七〇〇円

Atom 実践入門

大竹智也著

Atom は Github が開発したテキストエディタで、CSS や JavaScript

といった Web 技術をもちいて作られているのが特徴。正式版のリリースからまだ一年と若々しいアプリケーションだが、様々な機能を追加するパッケージもすでに四千以上登場するなど、コミュニティも活発だ。旬のエディタを、あなた好みにハックしよう。

技術評論社

二六八〇円

今月の
おすすめ

自然科学

外来種は本当に悪者か？

新しい野生 THE NEW WILD
フレッド・ピアス著

その土地に固有なものや身近で親しいものに愛着を持つほど、異質なものや見知らぬものに対する恐怖と憎悪は大きくなる。生態学において、「外来種」は侵略者として排除すべき対象であった。捻じ曲がった「自然観」もそれを助長している。「完成された自然」や「手つかずの原生林」などという神話をでっち上げ、存在し得ないそれらを保護・再生しようと、世界中で多額の費用が投じられている。

環境破壊は「外来種」が引き起こし、「在来種」は絶滅の危機を迎えているという環境保護団体の主張はしかし、そもそもなぜ「外来種」が侵入したかという原因から目を背ける、単なる責任転嫁に他ならない。そうやって仕立て上げた「外来種」から、我が土地に固有の「在来種」を守ろうというのだが、「在来種」それ

自体、大きな時間の流れのなかでは存在しないのではないかと筆者は言う。これらのことは、動植物間だけの問題ではなく、人間社会にも敷衍して思考されるべきであろう。

草思社 一八〇〇円

カラスと京都

松原 始著

『カラスの教科書』（雷鳥社・一六〇〇円、講談社文庫・七二〇円）を書いた著者の新刊である。

動物学を志し浪人を重ねて京都大学に入った氏が、当時のフィールドノートをもとに学生生活とカラスとの日々を振り返ったエッセイ。我々が普段目にするのは研究の成果だけなのだが、研究の過程や研究者たちの日常がつぶさに書かれているのが面白い。中でも脊椎動物学の講義で出された「分類学を踏まえた上でクジラは魚か哺乳類かを論ぜよ。ただしクジラは哺乳類であると結論づけたら単位を与えない」という課題の件は秀逸。

なおこの本はhonto（本の通販ストア）での取扱いはあるが、取次経由で

の流通をしていない。八月時点で店頭在庫があるのは丸善の京都本店、ジュンク堂の京都店・三宮店・池袋本店、M J梅田店となっている。

旅するミシン店 一五〇〇円

ダーウィンの覗き穴

メノ・スヒルトハウゼン著

突然変異と適者生存による進化の結果として現在の生物が存在しているということは理解しているつもりだが、この本で紹介されている性的器官のバラエティの豊富さ、その巧妙さを前にすると、とてつもなくアイデア豊富で器用な神様が思いつくまま作り上げたのではと思ってしまう。繁殖をめぐる利害が対立するメスとオスが、互いを出し抜こうと競争を重ねた結果から生まれた多様な性的器官や性行動の世界を、ユーモアをのぞかせながら多くの図版とともに紹介している本書を読めば、生殖器研究に対するあなたの持つイメージは驚きとともに一新され、それを明らかにしていった科学者たちのあくなき好奇心と研究心にも敬意を払いたくなるに違いない。

早川書房 二二〇〇円

今月の
おすすめ

医学書

知らなかったでは済まされない！

糖尿病コンサルトの掟

岩岡秀明・栗林伸一編著

近年日本では食の欧米化や運動不足などによりライフスタイルが変化し、糖尿病の疑いが強い人や糖尿病予備軍が急増している。内科で診療している医師は必然的に糖尿病患者の主治医になる機会が増えるが、糖尿病は様々な合併症を引き起こす可能性があり、主治医一人だけで患者を診ることは難しい。他科や専門医にコンサルト（診療依頼）や紹介をする必要が出てくる。

本書ではコンサルトの重要性や円滑にコンサルテーションを行う為のポイント、日常診療の心構えなどを解説している。また実際に糖尿病専門医ならではの診察テクニックも簡潔にまとめられており、糖尿病治療に関わる医療従事者にとって必携の一冊となっている。

金原出版

三四〇〇円

死すべき定め

死にゆく人に何ができるか

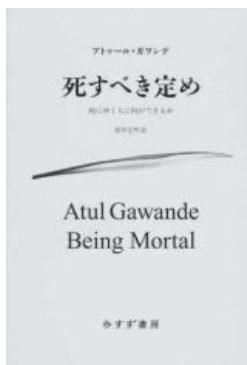
アトゥール・ガワンデ著 原井宏明訳

アメリカでベストセラーになった本書。著者は現役の外科医で、ライターでもある。（前作は『医師は最善を尽くしているか』みず書房）

医師として経験した死に対して医学がどういう影響を与えるのかを考える。ただ医者に言われるままに治療するだけが患者にとって豊かな死を迎えるための選択ではない場合もある。豊かに生きる方法だけでなく、いつかくる日のために必要なことをもつと知らなければならぬ。

みず書房

二八〇〇円



産み育てと助産の歴史

白井千晶編著

女性が命をかける出産の介助をする助産師。江戸時代には取り上げ婆と呼ばれ、産婆・助産婦・助産師へと改称されてきた。日本の近代化とともに様々な政策・（法）制度が設けられるなかで、お産はどのように営まれ、変化してきたか。助産師はどう関わり歩んできたか。歴史的背景を振り返りながら助産活動の変遷を学び、助産と産む女性双方の視点から子どもを「産み育てる」営みを考える。助産師をめざす方だけでなく多くの女性に読んでほしい。

医学書院

二八〇〇円

障害者のリアル×
東大生のリアル

野澤和弘編著

障害者やその関係者の息づかいや生活、人生に触れることを目的とし、学生たちの自主ゼミから始まった「障害者のリアルに迫る」東大ゼミ。当事者やその家族など多様な講師を招き行われた講義を通して、若き東大生が感じ、葛藤し、そして掴んだ何かを必死に表そうとしている。正にそれぞれの「リアル」な言葉で。

ぶどう社

一五〇〇円

今月の
おすすめ

社会科学

行動経済学の逆襲

リチャード・セイラー著

著者は昨年アメリカ経済学会会長に就任したシカゴ大学の経済学者。今や行動経済学の大家である。その著者の研究者人生を通じて、行動経済学が往年の大経済学者たちと対立しながら、どのように確立し、政府の政策形成にまで影響を与えるほど発展してきたのかを綴っている。加えて、行動経済学の理論や専門用語についてもたとえ話や実験を紹介し、解説しながら話は進んでいく。学説史でもなく、学生向けのテキストとも違う独特の構成である。

早川書房

二八〇〇円

吉田茂と岸信介

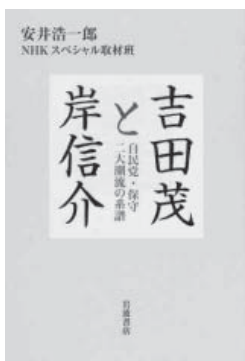
安井浩一郎・NHKスペシャル取材班著

昭和の政治で重要な役割を果たした総理大臣は数多くいるが、本書では特に吉田茂と岸信介の二人に注目。ほぼ同じ時

代に首相を務めたが、改憲、安保、経済政策といった面で、お互い対照的なタイプだったことが本書を読むとよくわかる。放送局内にあつた資料の掘り起こしや、当時の関係者への取材など、丁寧な仕事を感じられ、戦後政治史の研究書として非常に濃い内容となっている。

岩波書店

一八〇〇円



プライベートバンカー

清武英利著

プライベートバンカー（P/B）とは、富裕層向けに資産の運用・管理を行うカネの執事のこと。パナマ文書で注目される租税回避を助けるのも彼らの仕事だ。

本書はP/Bを主人公としたノンフィクション。舞台は租税回避地の一つシンガポール。登場人物はほぼ実名。伶俐で狡

猾な世界と思いきや、泥臭く顧客を奪い合いノルマに苦しむP/B、暇を持て余す富裕層、潜伏する国税調査官など、リアルな熱気が伝わってくる。

富めるものが更に富むこの世界は、庶民には無縁のようである。税制上の問題など九十九%の市民にも深く関わる。一気に読める面白さだが、考えさせられる。

講談社

一六〇〇円

結婚クライシス

山田昌弘著

本書は、若者や家族をめぐる社会問題研究で定評のある山田昌弘氏による、毎日新聞連載コラムをまとめたもの。

今回著者は「なぜ日本人は結婚しなくなったのか」の問いに着目する。かつては結婚後一戸建てを持ち、子どもを大学に進学させるのが普通だったが、今やそれは極めて難しくなった。背景には若者の恋愛意欲の低下、正規雇用の減少、その結果親に年金で養ってもらう人の増加など、生活の経済的基盤を整えにくい現状がある。日本の抱える様々な問題を、未婚者の分析から考察する一冊。

東京書籍

一四〇〇円

若者離れ

電通若者研究部編

いま様々なジャンルで若者の○○離れ

という現象が見受けられる。いつの時代も消費を牽引するのは若者の購買力だ。電通には若者の生態を研究する特別なチーム、通称ワカモンがある。若者を十のタイプに分類、それぞれの解説が特徴をよくとらえている。

企業の商品開発やマーケティング等の部署の方にとても役立つ一冊だが、いまどきの部下の扱いに悩む中間管理職の方にもおすすすめ。スマホやSNSに疲れ、そういつたツールのまだなかつた時代に憧れを抱く若者が四割もいるという統計に驚かされる。

エムディエヌコーポレーション

一五〇〇円

世界一子どもを

育てやすい国にしよう

出口治明・駒崎弘樹著

保険料を半分にするからそのお金を子育てに使ってもらおうという理念のもと、ライフネット生命をたちあげた出口氏。病児・障害児の保育業を運営する社

会起業家の駒崎氏。この二人が日本の子育て問題をメインに、様々なテーマを議論する対談集。

他国の好例も多数とりあげ、政治が変わってトップが本気になれば、すぐにも状況が改善されるはずだという熱い思いが伝わってくる内容。出生率が上昇すれば、労働力も確保され、経済も安定する。あらゆる面で好循環が期待できることがデータの上でもよくわかる。

ウエッジ

一二〇〇円

学術書の編集者

橘宗吾著

本書は編集者による編集論と言っても、いわゆるベストセラーとは趣が異なる学術書の編集についてのもの。もとは講演や研修での報告をもとに加筆、修正されたものである。昨今の出版状況を整理しながら、大学の研究者との人脈づくり、査読や助成と言った一般の編集ではあまり出てこないテーマなど多岐にわたって論じている。そのため、学術書の編集者としての姿を中国の知識人や士人、商人などの間を取り持つ隠者である「山人」と例えている。

慶應義塾大学出版会 一八〇〇円

「おそ松さん」の企画術

布川郁司著

株式会社びえろの創業者である著者が、社会現象を巻き起こした「おそ松さん」が何故ここまでヒットしたのかを、企画術の観点から切り込む。

当初は予算集めに難航した「おそ松さん」の企画だが、著者は、びえろの制作アニメ「しろくまカフェ」が人気声優の起用やネットによる話題拡散によってヒットした経験から、この企画に「ヒットの芽」を感じたという。好奇心を常に持ち続け、作品への愛を大切に、一体感のあるチームづくりをする事が重要であると、数多くの名作を手掛けてきた著者が語る。

集英社

一二〇〇円



今月の
おすすめ

人文科学

帝都東京を中国革命で歩く

譚 璐美著 書店員としてはどこの棚においていいのかまったくわからない本であった。中国革命の痕跡を、現代東京を歩き回って探すなんて……だがこれが面白いのである。著者の父親は中国革命に巻き込まれて日本へ亡命してきた。明治維新を成し遂げた日本へ留学するのはその頃の中国でブームになっており、大勢の知識人が日本へ集まっていたのである。早稲田・本郷・神田のあたりを歩きながら、若き革命家たちの足跡を辿る。

白水社

一八〇〇円



「百学連環」を読む

山本貴光著

思想家、西周の「百学連環」とは、明治から江戸にかけて活躍した私塾での講義録。その内容は、当時の西欧学術全体を、相互の関連の中で広く見渡してみようとするものだった。本書ではこの「百学連環」を著者の解釈とともに読み進めていく。西周は現在存在する「知識」「芸術」「心理学」などの訳語をつくった人物でもある。現代日本の学問の起源に触れるという意味でも示唆に富む一冊。

三省堂

三二〇〇円

3・11と心の災害

福島にみるストレス症候群

蟻塚亮二・須藤康宏著

震災後のストレス症候群の詳細な報告である。ただし無味乾燥な記録ではない。東日本大震災以後、福島では「あいまいで宙ぶらりんの未来」との格闘が続いている。原発事故は「悲しみあうための人のつながり」も壊してしまった。本書はそのような「見えない苦しみ」を可視化しようとする取り組みである。

大月書店

一八〇〇円

仏教と気づき

ケネス田中編著

「悟り」がわかるオムニバス仏教講座
宗教というと、一般的に何か目には見えないものを信じる営みというイメージがある。現代に生きる我々にとつて、その行為は受け入れ難いものに思えるが、仏教は「何かを信じる」ものではなく「悟り」「気づき」を目指すものであると著者は語る。「気づき」に近づくための五つのアプローチ方法が紹介しながら、仏教の本質に迫る一冊。

武蔵野大学出版会

一七〇〇円

子どもの心の育てかた

佐々木正美著

児童精神科医として半世紀以上子どもの成長を見てきた著者による、乳幼児期から思春期までの子育てへのアドバイス。子どもは生まれながらにして、自ら発達する力を具えている。親はその力を信じ、子どもの望むことを受け入れ、温かく寄り添うことが何より大切だという。一方、親の望みで干渉しすぎることが子どもの成長を歪ませる危険性を説く。

河出書房新社

一三〇〇円

今月の
おすすめ

文学・文芸

ナゴヤドームで待ちあわせ

太田忠司・吉川トリコ・鳥飼杏宇・

広小路尚祈・深水黎一郎著

名古屋在住の太田忠司さんをはじめとする、ドラゴンズファンの作家によるドラゴンズファンのためのアンソロジー。ドラゴンズや野球のことを知っているほうがより面白いが、もしそうでなくてもそれぞれの作家がそれぞれの持ち味で提供した作品はきつと楽しめるだろう。

五作品のうち二作が、多くのドラゴンズファンにトラウマとして記憶されるあの「10・8」を題材に選んでいるので、それについては「10・8 巨人 vs. 中日 史上最高の決戦」（文春文庫・鷲田康著・七〇〇円）を副読本としておススメしておきたい。巻末の大矢博子さん（もちろんだらゴンズファン、それともかなり熱狂的な）の熱のこもった解説も必読です。

ポプラ社 一四〇〇円



総選挙ホテル

桂 望実著

何もかもがパツとしない中堅ホテルで、業績打開のための大改革が始まる。大学で社会心理学を教えていた教授が、社長に就任。ちよつと変わった彼が打ち出す案は、従業員による従業員の為の総選挙に、監視カメラによる行動チェックなど、どれも斬新なものばかりだった。そこには様々なドラマがあり、しばらくは職場の空気がギスギスし、混乱があるも、次第に平穏を取り戻してゆく。

ホテルという職場・自分自身・仲間を見つめ直すよい機会となり、従業員たちはお互いを信じ協力し合い、自分で考えて行動するようになっていくのである。

ちなみに私は、そんな中の一人、後藤さんのファンになった。（きつと、スタツ

フの誰かに感情移入したくなるはず。それくらい、皆魅力的になる。）
仕事に悩める人々にぜひおすすめしたい一冊。いろいろあるけれども、明日も頑張ろう！そう思えてくる。働く大人の成長物語。

KADOKAWA

一五〇〇円

市立ノアの方舟

佐藤青南著

赤字続きで廃園の噂もある市立の動物園を舞台に、市役所から人事異動でやってきた素人園長と、ひと癖ある飼育係たちの姿を描いたお仕事小説。動物園の舞台裏での仕事や動物たちの生態、飼育係の人たちがどんな思いを抱いてその仕事を選び、何を実現しようとして働いているのかなどをつづり、動物園で働く者やそこへやって来る人たちの変化や成長をも見せてくれる。動物たち、動物と人、そして人間同士の間にも生まれるドラマや動物園についての興味深い知識に触れて、読んで後はきつと動物園に行きたくなりま

すよ。

祥伝社 一六〇〇円

今月の
おすすめ

文庫・新書

本屋さんのダイアナ

柚木麻子著 人には、大なり小なり何かしら呪いがかかっている。そしてその呪いを解くことができるのは自分だけ。主人公のダイアナは、漢字で書くと「大穴」。キャバクラで働く母に染められた金髪で、父親を知らない。普通に日本人名前と外見のおかげで孤独だったダイアナは小学校三年生のクラス替えで、黒髪におかっぱ、「いいおうち」のお嬢さんである彩子と出会う。まったく違う環境で育ってきた二人だが、共通の趣味である本を通じてすぐに仲良くなる。ずっと親友のはずだったが、ちよつとした行き違ひから二人は絶交状態になってしまう。二人はまた親友に戻るのだろうか。ダイアナの父親はどこにいるのか。そしてダイアナだけではなく、彩子にも呪いはかかっていた。小学生から二十代前半までの二人の視点を通して、彼女たちが呪いを解くまで

の物語。 新潮文庫 六三〇円

ライオンはとてつもなく不味い

山形 豪著 少年時代を西アフリカで過ごし、日本での学生生活になじめなかった著者は青年期をタンザニアで過ごした。現在は南アフリカを拠点とするカメラマンとして活躍し、本書には「死ぬ間際のライオン」や「目を見開き唸り声を上げるカバ」、「母親のもとへと駆けていくチーターの子」など、非常に魅力的な写真が掲載されている。

ところでライオンの肉を食べたことのある日本人ははたしてどれくらいいるのだろうか。ちなみにその肉はタイトル通り、とてつもなく不味いらしい。

どういう経緯でライオンの肉を食するに至ったのかと興味本位で手に取ったが、結果として、自らの生活圏にライオンがいるアフリカの人々と、檻やファインダー越しでしか接することのない我々の捉え方は大きく違うことを改めて感じた。

威嚇するカバやサイを前にしても、ファインダー越しに対峙していると感じが麻痺してしまうというから恐ろしいことこの上ないが、知識さえあれば危険を回避

できる可能性の高い野生動物よりも、結局は一番人間が怖いのだという事例も多々紹介されており、様々な角度からアフリカの姿を垣間見ることができた。

集英社新書ヴィジュアル版

一三〇〇円

伝説のホテルマンが教える

大人のためのホテルの使い方

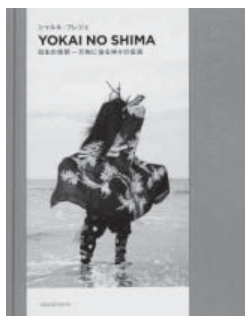
窪山哲雄著

旅行の楽しみのひとつにホテルがある。日常と離れた空間に足を踏み入れると気分が高まる。泊まるためだけの場所ではなく、旅を盛り上げてくれる様々な楽しみがホテルにはある。仕事でホテルを利用する場合にも、機能を熟知すると仕事をグレードアップさせることが可能だ。

本書では「伝説のホテルマン」が、いいホテルを見極めるポイント、ホテルにできること、また、そこで振る舞い方を教えてくれる。こんな風に使えんだ、という目からウロコの機能が満載。そして同時に、こういう使い方をスマートにできる、素晴らしいホテルにふさわしい素敵な大人になりたい、と思わせてくれる。 SB新書 八〇〇円

今月の
おすすめ

芸
術



YOKAI NO SHIMA 日本の祝祭
シヤルル・フレジェ著

フランスを拠点に活躍する世界的評価の高い写真家シヤルル・フレジェ。前著『WILDER MANN』（青幻舎・三八〇〇円）ではヨーロッパで行われる祭りに登場する獣人の姿を撮影し、話題をさらった。今回は日本の祝祭に登場する神々（に扮した人々）を撮影している。日本にここまで沢山の祭りがあったということにまず驚かされた。

読み進めるうちに広がる不安感。どの写真にも共通するのが、お面などによっ

て顔が隠している点である。顔が見えないだけでこんなにも奇妙な感じを受けるのか。

巻末には祭りについての説明書きが収録されているので、それを読んだ後に写真を見ると、それぞれの持ち物、扮装の意味が分かり、また面白い。

青幻舎インターナショナル

三八〇〇円

30年30話

クリエイター30組の対話による

デザインの過去・現在・未来

クリエイションギャラリーG8監修

「クリエイションギャラリーG8」という、グラフィックデザイン専門のギャラリーの創設三十周年を記念した展覧会、「30年30話」で行われたトークイベントをまとめた一冊。

三十人のクリエイターが対談相手指名しながら各々のテーマでデザインについて語る本書。まずはその豪華な顔ぶれに驚かされる。今を時めく若手クリエイターから重鎮までが、デザインというジャンルにとらわれず様々な職種の方と対談されているので、いろいろな角度からデ

ザインを考察できる内容となっている。

対話形式で構成されているのでとても読みやすく、フランクに話が進んでいくので、評論書とはまた違った魅力の詰まったものとなっている。

誠文堂新光社

二〇〇〇円

笑点五〇年史 1966 - 2016

「チャンチャカチャカチャカ、チャンチャント」のテーマ曲でおなじみ、人気長寿番組「笑点」。一九六六年五月十五日に放送が開始され、今年五十周年を迎えた。今日まで続く人気の秘訣は、やはり個性豊かなメンバーが繰り出す謎かけや、大喜利に名（珍？）回答の数々ではないだろうか。

出演者や関係者のインタビュを交えながら過去の写真と共に笑点五十年の歴史を振り返る。歴代司会者や歴代の出演者、過去の企画など、今の笑点しか知らない方にとっては新しい発見ばかりである。昔からの笑点を知っている方にとっては懐かしい話のオンパレードである。これからの笑点がどうなっていくのかも楽しみな一冊。

ぴあ

一八五二円

**今月の
おすすめ**
実用書
地図・旅行書

もしもごはん

災害時に役立つ

かんたん時短、「即食」レシピ

今泉マユ子著

自然災害時に役立つ、非常食レシピを学ぼう！

心と体の健康維持に欠かせない大切な「ごはん」。非常時だって、美味しく頂くことができるに越したことはない。被害の程度によって避難所生活を余儀なくされることもあり得るが、本書では自宅に留まることができた場合を想定している。(よって、突然のケガや病気で買物に出られない場合にも役立つ優れものだ。)

掲載されているレシピは三つのステップに分かれており、電気・ガス・水道が止まっても作れる「即食」レシピ。続いて災害発生から四日目〜七日目まで最適な「省エネ」レシピ。最後に災害発生八日目以降、徐々に体調を整えてゆく為の「整食」レシピとなっている。

レシピ以前に何をどれだけ備えればいいのか正直よくわからないヨ、という人にも安心！ 揃えるべき飲食物品、量、ストック方法、お役立ち調理アイテムから「もしも」に備える知恵まで、オールカラーで網羅されている万人必読の書である。

清流出版

一五〇〇円

新編 山のミステリー

異界としての山

工藤隆雄著

本書は、山小屋の主人や登山者の、山中でのさまざまな奇妙な体験を一冊にまとめたものである。内容別に「山の幽霊ばなし」「人智を超えるもの」「自然の不思議」「ひとの不思議」の四つに大別されており、すべて実話の全五十六話で構成されている。一話あたり平均五ページ程度なので、読書が苦手な方にもお勧めできる一冊である。

登山が趣味の方やこれから登山を始めた方と思っている方にとっては、山の裏側を知る絶好の機会となり、山登りをしない方にとっては、暑い夏にピッタリのない話集となるだろう。

山と渓谷社

一一〇〇円

ロープウェイ探訪

松本晋一著

鉄道、バス、飛行機など、世の中にはいろいろな乗り物があり、それぞれのファンに向けてたくさんの本が出版されている。そのなかでも異彩を放つ一冊が発売となりました。

平成十七年からロープウェイ巡りを始めた著者が贈る本書は、なんと国内のロープウェイ一四五路線を網羅。搬器(乗客を乗せる車体)や車窓からの眺めはもちろん、運行日、料金、アクセス、全長、所要時間、高低差(ノ)、最大勾配(〃)まで盛りだくさん。本文もロープウェイへの愛あふれる落ち着いた文体で、ガイドブックでありながら読ませる、という優れもの。全頁フルカラーで掲載されている写真も非常に美しく、行ってみたいノという思いに駆られる。

グラフィック社

一七〇〇円

今月の
おすすめ

語学・辞典

英語は20の動詞で伝わる

佐藤洋一著

英語を話せるようになりたいと思っ
ているのに、なかなか思うように話せるよ
うにならないと悩んでいる方は多いので
はないだろうか。

本書はたった二十の動詞でネイティブ
に伝わる英語が話せるようになることを
目指す。英語学習のポイントは単語であ
り、特に動詞が大事だという。単語の数
は問題ではなく、すでに知っている動詞
の使い方をきちんと身につければ、たい
ていことは話せるようになる。

一つの動詞につき、その基本イメージ
が見開きでイラストと解説がついており、
前置詞によってその意味が広がって行く。
一つの動詞がこんなに沢山の意味をも
つと分かれれば、多くの表現が出来、英語
の感覚を掴みながら伝わる英語を話せる
ようになるだろう。

かんき出版

一三八〇円

イメージと語源でよくわかる
似ている英単語使い分けBOOK

清水建二・すぎきひろし著

本書では基本の英単語を動詞編・形容
詞&副詞編・名詞編の三つの章に分け、
その意味の違いがしつかりと身につくよ
うイラストと一緒に覚えられる。

このイラストが、余計な情報を入れず
シンプルにまとめられており、とてもわ
かりやすい。また、それぞれの意味の使
い分けでは冒頭で「適当な単語はどれで
しょうか？」という問いを投げかけ、こ
ちらが意味の違いに対して、曖昧な認識を
しているということをはからせてくれる。
実用的な単語集であることはもちろん、
読み物としても面白い。語源に興味のあ
る方すべてに読んでいただきたい一冊。

ベレ出版

一八〇〇円

本当はちゃんと通じてる！
日本人エイゴ

カン・アンドリュエー・ハジモト著

日本人がしてしまう英語の間違いを
「日本人英語」や「学校英語」として紹
介し、ネイティブスピーカーはこのよう
な言い方はしない、と紹介する書籍は多
い。そのような指摘はとても意味のある
ものだが、同時にこれを読んだ方は失敗
を恐れて話しづらくなるのではないかと
も思う。

本書はこのような「日本人英語」と呼
ばれるフレーズを非ネイティブスピー
カーが使用した時、七十二人のネイテ
ィブスピーカーがどのように感じるかを
紹介している。その結果、多くのフレー
ズが実はネイティブスピーカーにとっ
て問題ないと感じていることが分かる。
また、「笑顔で言えは偉そうには聞こえ
ない」「話された状況で分かると思っ
し、分からなければ別の表現で言い直して
もらおう」など会話において重要なのは正
誤だけではないと気づかされる。勇気を
出して英語を使ってみようと思える一
冊だ。

アルク

一一二〇〇円



今月の
おすすめ

児童書

こぶしのなかの宇宙

小さきものたちのスケッチ

いせひでこ絵・文

赤ん坊、赤ん坊とお母さん、子どもたちのスケッチ集です。これまでの作者の作品がつながって出来た作品のようにも思えます。子どもをそっと見守る作者の温かさを感じます。

平凡社

一四〇〇円

百年後、

ぼくらはここにいないけど

長江優子著

「百年前の渋谷をジオラマで作る」という難題に挑むことになった地理歴史部（通称チレキ）の部員たち。不器用な新部長の健吾を中心に、中学生の彼らは、自分たちの暮らす街が時代の流れで移り変わってきた過程を知るなかで、その過ぎ去っていった時間には、確かに今の自分たちと同じように当時の人々の暮らし

の営みがあったということに気づきます。今ここで生きている時間の大切さを感じながら、様々なコンプレックスや悩みや葛藤を乗り越え、いよいよジオラマ完成へと山場を迎えます。

講談社

一四〇〇円

生命の始まりを探して

僕は生物学者になった

長沼 毅著

生命の始まりと終わりを求めて、自らを辺境生物学者と呼ぶ筆者はその名の通り、生物の生存が制限される辺境の地を数多く訪れてきました。生物が与えられた環境にどう適応し、進化していくか。その過程とともに、探求していく筆者自身の姿が不思議と重なって見えてきます。

河出書房新社

一三〇〇円

ブックトークのきほん

— 21の事例つき

東京子ども図書館編

子どもを本の世界へ招く手だての一つであるブックトーク (Book talk)。学校や図書館などで行われることが多く、通常ある一つのテーマに沿って、複数冊の

本を紹介していきます。基本解説、シナリオの作成、実演の工夫や注意事項まで網羅されており、入門者にとって実践的で役立つブックレットです。

東京子ども図書館

六〇〇円

アニマリウム

ようこそ、動物の博物館へ

ジェニー・ブルーム著

ケイティ・スコット絵

生物の進化を表した系統樹をたどってゆくと、人間はずいぶん枝先の方にいるのだとわかります。象徴的な生命の樹(系統樹)から始まる本書は、魚類・爬虫類・鳥類など種の分類ごとの展示室に分かれており、まさに博物館を訪れているような気分です。

汐文社

三二〇〇円



『世界中のトップエリートが集う禅の教室』

吉見 満雄

目から鱗の一冊が出た。

禅に関する書物はとても数多いが、殆どが禅の修行者や研究者、せいぜい一部の特殊な読者向けだった。道元禅師の「正法眼蔵」を頂点にしてその解説書、近くは鈴木大拙の「禅の本」、脳科学者の座禅体験報告等々どの図書館でも一コーナーを占める程である。

ところが本書はそれらのどれとも違う。先ず坐禅や禅宗に全く素人でもよく判る。つまり特殊な世界だけに通用する言葉、概念を前提とせず、普通の人々が理解できる言葉、概念で書かれている。著者は禅宗の僧侶でありながら、本書の視点は、一人の親、アメリカ生活を経験した社会人、実業世界とも交流の深い日常生活を送る生活人としての立場から観ている。だから、私達一般読者の日常、日々の生活に追われるサラリーマンを含むビジネス社会との橋渡しができています。それは坐禅を宗教体験の視点からではなく、「自分を見詰める機会」、その為の「瞑想」、更には「マインドフル

ネス」(心のエキササイズ)という門外漢の人にも必要な「心のトレーニング」の視点から出発しているからだ。これ等の視点は多くの日本人、さらに仏教・東洋の知恵に馴染みの少ない外国人にも共通する心底からの想いなので広く世界に通じ得る。こうして取っ付き難かった坐禅、禅、仏教という高みに導かれる切っ掛けが生まれる入門書の役割こそ本書の素晴らしさと思う。

本書を通して日常生活に禅を取り入れたい。そして多くの人々の共感を得て、混迷する現代社会を変える知恵の一つとして禅の実践が広まろう。その結果、物欲・金銭欲に引きずられそうになる資本主義経済の混迷の中に、心豊かな人間復興の循環型経済システム構築の一燈明となつて欲しい。(七十九歳・NPO法人役員)

*『世界中のトップエリートが集う禅の教室』(KADONAWA・川上全龍著・一六〇〇円)

『タダで大学を卒業させる法』

野瀬 貴久

我が家では、今年、長男が受験生である。さらに、その二年後には長女も大学受験を控える。親にとつて、学費の問題は待ったなしである。さて、今から約三十年前、私が高校生だった頃、我が家にはそれなりの余裕があった。私が受験する先について、親から、学費の面についてとやかく言われたことはなかった。その点では幸せであった。さらに、思い返すと、高校在学中に、数学で落ちこぼれかけて、困ったときには、家庭教師や塾など、両親から、全面的なサポート体制を敷いてもらった。しかし、私は、高校時代、勉強する・しないのムラが激しかったし、受験生になっても、部活動に顔を出すなど、幾分、ふらついていた。さて、本書を読んで、わが子が「タダで大学を卒業」できる秘策を伝授されたわけではない。しかし、実際問題として、息子が進学する先によっては、奨学金を組む必要があることを認識した。ところで、折しも、息子が、学校から、奨学金の申込書をもたらってきた。まだ行く先の大学も決まっていないのに、どういうことなのか？ なお、これは、その予定のある人は、あらかじめ申し込んでおくものらしい。私は早速申し込んだ。

さて、本書では、三人の子どもを遠方の大学に下宿させて行かせ、父親である著者は、窮乏生活を強いられているという状況が、冗談交じりに活写される。著者もすでに故人のようであるが、その語り口は面白く、読者を飽きさせない。なお、著者は、予備校の講師であるが、たまに私立高校へ講演に呼ばれるらしい。その時には、訪問先の関係者に、いつも次のような質問を投げかけていたという。「先生の学校には、保護者の勤める会社の倒産・リストラなどによって授業料を払えずに退学してしまう生徒が何人くらいいますか」この問いに対し、著者の知り合いの先生から返ってきた言葉が、私には印象に残った。子どもが退学を余儀なくされるのは、単に経済的な事情からではない場合が多い。それは、「家庭内の不和」など、家庭崩壊が主因のようである。現に、子どもを退学させる、富裕そうな家庭もあるという。どちらにせよ、子どもを退学させる家庭に取り、子どものことは、既にどちらでもよい事柄になってしまっているという。これでは子どもが可哀そうであるが、このような経験をした子どもは、長じてしっかりとした大人になるのかも知れないと

思った。どちらにせよ、その衝撃的な内容に、少しびつくりした。

さて、著者には『ぐうぜん東大に合格させる法』（三五館、品切）という著書もある。次はこれを読んでみた

いと思った。

（五十一歳・会社員）

*『タダで大学を卒業させる法』（三五館・吉本康永著・一三〇〇円）

『すばらしい黄金の暗闇世界』

片岡 英夫

著者の椎名さんは、自らを「活字中毒」というほどの読書好きで、酒をこよなく愛しておられます。これは私も同様ですから、椎名さんの本は私と波長が合うというか、とにかく好きです。

そんな椎名さんの本の中から『すばらしい黄金の暗闇世界』を紹介します。十九のエッセイで構成されており、普通の人なら知らないような事を紹介しながら、自分の意見をさりげなく交えて話を進めていますので「うん、うん」と頷くばかりです。

例えば、沖繩の海ヘビ（エラブー）は干物にし、食用となります。ところが、コブラの猛毒の持主であるのに、なぜわりと簡単に捕獲できるのかといえは、毒のある牙は口の奥にあるので、エラブーを脅かし、大きくあけた口の中にわざわざ指を深く差し込まない限

り大丈夫という理由です。

本の中身のことはこれくらいにします。

この本では、気軽に読み進めていく間に色々知らなかった事を知るといふ楽しみがあります。著者の椎名さんが読まれた本の中から披露してくれている事が多いのですがその本も紹介されていますので「次、この本を読んでみようかな」という気持ちにもなります。

知らない事を知るといふのは、お金とは違う意味で、豊かな気分になれます。そして、知ることですごい増えた「知識」は、一つの貴重な「財産」といえるのでは、ないでしょうか。（五十七歳・高校教員）

*『すばらしい黄金の暗闇世界』（日経ナショナルリジョグラフィック社・椎名誠著・一八〇〇円）

ATION

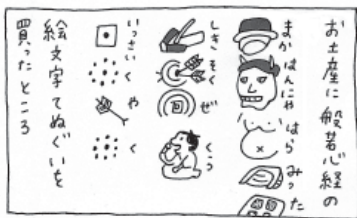
<p>ジュンク堂書店 ＝名古屋栄店＝ ☎(052)212-5360 [営業時間] 10時～20時</p> <p>丸善 ＝名古屋セントラルパーク店＝ ☎(052)971-1231 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝口ト名古屋店＝ ☎(052)249-5592 [営業時間] 10時半～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝名古屋店＝ ☎(052)589-6321 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝岐阜店＝ ☎(058)297-7008 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝四日市店＝ ☎(059)359-2340 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝滋賀草津店＝ ☎(077)569-5553 [営業時間] 10時～22時</p> <p>丸善 ＝京都本店＝ ☎(075)253-1599 [営業時間] 11時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝京都店＝ ☎(075)252-0101 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝高槻店＝ ☎(072)686-5300 [営業時間] 10時～22時</p>	<p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝梅田店＝ ☎(06)6292-7383 [営業時間] 10時～22時</p> <p>丸善 ＝関西国際空港店＝ ☎(072)456-6486 [営業時間] 7時～21時半</p> <p>丸善 ＝八尾アリオ店＝ ☎(072)990-0291 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝高島屋大阪店＝ ☎(06)6630-6465 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝大阪本店＝ ☎(06)4799-1090 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝難波店＝ ☎(06)4396-4771 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝天満橋店＝ ☎(06)6920-3730 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝上本町店＝ ☎(06)6771-1005 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝梅田ヒルトンプラザ店＝ ☎(06)6343-8444 [営業時間] 11時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝近鉄あべのハルカス店＝ ☎(06)6626-2151 [営業時間] 10時～20時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝奈良店＝ ☎(0742)36-0801 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝西宮店＝ ☎(0798)68-6300 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝芦屋店＝ ☎(0797)31-7440 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝神戸住吉店＝ ☎(078)854-5551 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝三宮駅前店＝ ☎(078)252-0777 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝三宮店＝ ☎(078)392-1001 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝神戸さんちか店＝ ☎(078)335-2877 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝舞子店＝ ☎(078)787-1250 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝姫路店＝ ☎(079)221-8280 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝岡山シンフォニービル店＝ ☎(086)233-4640 [営業時間] 10時～20時</p>	<p>丸善 ＝広島店＝ ☎(082)504-6210 [営業時間] 10時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝広島駅前店＝ ☎(082)568-3000 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝高松店＝ ☎(087)832-0170 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝松山店＝ ☎(089)915-0075 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝博多店＝ ☎(092)413-5401 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝福岡店＝ ☎(092)738-3322 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝大分店＝ ☎(097)536-8181 [営業時間] 10時～20時</p> <p>丸善 ＝天文館店＝ ☎(099)239-1221 [営業時間] 10時～20時半</p> <p>ジュンク堂書店 ＝鹿児島店＝ ☎(099)216-8838 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝那覇店＝ ☎(098)860-7175 [営業時間] 10時～22時</p>
---	---	--	---

<p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 札幌店 ＝ ☎(011)223-1911 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 旭川店 ＝ ☎(0166)26-1120 [営業時間] 10時～19時半</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 弘前中三店 ＝ ☎(0172)34-3131 [営業時間] 午前10時～午後7時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 盛岡店 ＝ ☎(019)601-6161 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 仙台アエル店 ＝ ☎(022)264-0151 [営業時間] 10時～21時 日・祝10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 仙台TR店 ＝ ☎(022)265-5656 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 秋田店 ＝ ☎(018)884-1370 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 郡山店 ＝ ☎(024)927-0440 [営業時間] 10時～19時</p> <p>丸善 ＝ 水戸京成店 ＝ ☎(029)302-5071 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 丸広百貨店飯能店 ＝ ☎(042)973-1111 [営業時間] 10時～19時</p> <p>8月31日 OPEN ! 丸善 ＝ 丸広百貨店東松山店 ＝ ☎(0493)23-1111 [営業時間] 10時～19時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 大宮高島屋店 ＝ ☎(048)640-3111 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 桶川店 ＝ ☎(048)789-0011 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 津田沼店 ＝ ☎(047)470-8311 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 舞浜イクスピアリ店 ＝ ☎(047)305-5808 [営業時間] 11時～21時、土・日・祝10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 松戸伊勢丹店 ＝ ☎(047)308-5111 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 南船橋店 ＝ ☎(047)401-0330 [営業時間] 10時～21時</p> <p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 渋谷店 ＝ ☎(03)5456-2111 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 丸の内本店 ＝ ☎(03)5288-8881 [営業時間] 9時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 日本橋店 ＝ ☎(03)6214-2001 [営業時間] 9時半～20時半</p> <p>丸善 ＝ お茶の水店 ＝ ☎(03)3295-5581 [営業時間] 月～金10時～20時半 土10時～20時 日・祝10時～19時</p> <p>丸善 ＝ 多摩センター店 ＝ ☎(042)355-3220 [営業時間] 10時半～21時</p> <p>丸善 ＝ 有明ワンザ店 ＝ ☎(03)5530-5701 [営業時間] 10時～19時半</p> <p>丸善 ＝ メトロ・エム後楽園店 ＝ ☎(03)5684-5130 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 新宿京王店 ＝ ☎(03)5321-8327 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 池袋本店 ＝ ☎(03)5956-6111 [営業時間] 月～土10時～23時 日・祝10時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ プレスセンター店 ＝ ☎(03)3502-2600 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 大泉学園店 ＝ ☎(03)5947-3955 [営業時間] 10時～22時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 吉祥寺店 ＝ ☎(0422)28-5333 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 立川高島屋店 ＝ ☎(042)512-9910 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ ラゾーナ川崎店 ＝ ☎(044)520-1869 [営業時間] 10時～22時</p> <p>丸善 ＝ 横浜ポルタ店 ＝ ☎(045)453-6811 [営業時間] 10時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 藤沢店 ＝ ☎(0466)52-1211 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 新潟店 ＝ ☎(025)374-4411 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 岡島甲府店 ＝ ☎(055)231-0606 [営業時間] 10時～19時</p> <p>丸善 ＝ 松本店 ＝ ☎(0263)31-8171 [営業時間] 10時～20時</p> <p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 新静岡店 ＝ ☎(054)275-2777 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 名古屋本店 ＝ ☎(052)238-0320 [営業時間] 10時～21時</p>
---	---	---	---

営業時間は変更する場合がございます。ご了承ください。

定休日については、お手数をおかけしますが弊社HPまたは直接各店までお問い合わせ下さい。

ブックブルースター



投稿募集

☆読者の皆様の投稿を募集しています。最近読まれた本の感想文、本にまつわるエッセイ、など本に関するもの。最近読んでおもしろかった本、感動した本、考えさせられた本を教えてください。四〇〇字〜六〇〇字程度で、おすすめの本のタイトル、出版社、住所、氏名、年齢、職業を明記の上、お送り下さい。掲載分には二千円の図書カードを差し上げます。なお、原稿はお返しいたしませんのでご了承ください。

☆尚、本誌掲載と同時に、ホームページにも掲載させていただきます。

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二一五一五
丸善ジュンク堂書店「書標」編集室係
TEL〇三―五九五六一六一

いつも「書標」をご愛読いただきましてありがとうございます。本誌定期購読料は以下の通りです。

定期購読料 年間二二二〇円（送料込）
現金書留もしくは八十二円切手十五枚で

お申し込み先

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二一五一五
丸善ジュンク堂書店特急係
TEL〇三―五九五六一六一
FAX〇三―五九五六一六〇〇

編集後記

毎月弊誌の表紙と巻頭で、世界の書店を紹介してくださっている能勢仁さんの『世界の本屋さん』が、このたび書籍として刊行された。オールカラーの写真満載で、レイアウトや棚の造りもさまざまなのが興味深い。

*「カラー版 世界の本屋さん図鑑」(メディアアパル・能勢仁著・一五〇〇円)



PC・スマートフォンから
<http://www.junkudo.co.jp/>

QRコード



アジアミステリーブーム はやってくるか

今年の本屋大賞翻訳小説部門の第三位に台湾の呉明益『歩道橋の魔術師』（白水社）が入ったり、昨年始まった日本翻訳大賞で韓国のパク・ミンギュ『カステラ』（クレイン）が受賞したりと、アジアの文学が盛り上がりを見せている。こうなるとミステリー好きとして気になってくるのは、アジアのミステリー小説のことである。ここ最近、三年の周期で翻訳ミステリー小説界にブームが起こっている。《ミレニアム》三部作による北欧ミステリーブーム、『犯罪』によるドイツミステリーブーム、『その女アレックス』によるフランスミステリーブームである。仮にこれが続くとしたら、次のブー

ムが生まれるのは来年、二〇一七年ということになる。そして筆者としては、次に来るのはアジアミステリーブームではないかと期待している。

台湾には島田荘司推理小説賞という、日本のミステリー界の巨匠の名を冠した公募の長編賞があり、今までに第一回受賞作・寵物先生『虚擬街頭漂流記』、第二回受賞作・陳浩基『世界を売った男』（いずれも傑作ノ）が邦訳された。今年五月には第三回の受賞作・胡傑『ぼくは漫画大王』（文藝春秋）が発売され、丸善桶川店では販売促進のため、島田荘司先生と訳者の稲村文吾氏に連絡を取って直筆の色紙・ポップを書いていただいた。なお第三回は二作同時受賞であり、もう一作の文善『逆向誘拐』（仮）は秋に日本語版が刊行される。

（論創社）がまさに乱歩風のエンターテインメント小説で、もっと広く読まれていい作品だと思っている。金聖鍾『最後の証人』（論創社）も傑作である。もっとも、次のミステリーブームの座を狙っている(?)のはアジアミステリーだけではない。リオ五輪を意識して邦訳されたものかは分からないが、今年一月にはブラジルのミステリー小説、パトリシア・メロ『死体泥棒』（ハヤカワ文庫）が出版されたし、ほかにも南米ミステリーは近年邦訳が増加しつつある。何か一作、大ヒット作が生まれれば、北欧やドイツ、フランスに続く翻訳ミステリーの「産地」として注目を浴びることになるだろう。果たして次に注目されるミステリーの「産地」はどこになるだろうか。英米だけではなく、世界の多様なミステリー小説を読者の方々に知ってもらえればと日々思っている。（Y. A.）

「書標 ほんのしるべ」 第454号

編集・発行人 工藤 恭孝

発行所 (株)丸善ジュンク堂書店

印刷所 (株)七 旺 社

〒160-0008

〒653-0013

東京都新宿区三栄町二十九ニューフィロドビルディング

神戸市長田区一番町二丁目一

二〇一六年九月五日発行 頒価五十円（本体四十六円）

「書標 ほんのしるべ」昭和61年7月15日第三種郵便物認可
2016年9月5日発行（毎月1回5日発行 通巻第454号）



日本全国で
3,000万冊の品揃え!
丸善ジュンク堂書店

頒価 五十円（本体 四十六円）

ジュンク堂書店

淳久堂書店

M MARUZEN